参加した三池の闘いは
こんなにも豊かに、高く私を成長させたのだ。
いまこそ私は
「あんたは変ったなあー」と言う友の言葉を
長い苦しい三池の闘いの勲章として
有難く受取ろう——。

一九七〇年十二月十三日

子をもつ親として

宮浦指導部　斉藤一好

世はうつり変ろうとも
子の成長を祈る親の愛はとこしえに変らぬ　されど
政府・独占資本はこれをくつがえす
　水俣病　イタイイタイ病
　その他鉱公害・職業病
親はこの資本の手からいかにして子を守らん
鉱公害・災害・職業病に培われた子を涙して守るか
身をとして闘いに立ちあがるか
親として決起しよう　いとし子を守るために
そして鉄槌を下そう　世に害毒を流す悪魔に
それはあなただ　子をもつ親だ　自分だ

ちょっとどかんね
かたづけんなんけん
それでも起きあがることが
あっくうだ
庭の盆栽も
庭の雑草も
そのまま
雑草は伸びほうだい
盆栽は枯れる寸前
それでも
ごろり
ねころんだまま
三番方の帰りが
一番楽しみ
酒屋が
遅くまで
火を灯もしている
オレは自転車だ
アルコールを
腹の中であっためる

醜い戦争は原爆のきのこ雲と共に去り
かろうじて軍閥の黒い霧よりのがれた
若い「いのち」は帰った
迎えてくれる父母や妻がいるふるさとへ
しわだらけの顔をもみくちゃにして泣き
しわだらけの手を差しのべて力一杯ひき寄せ
胸深く抱いてもらった
「いのち」

この「いのち」を
その日その日のしあわせなきずなを
坑内保安をサボった奴の血に汚れた手が
無惨にもひき裂き
渦巻く暗黒の泥海の真っ只中に
叩きこんでしまった
この悪らつきわまりない奴の手を
許してたまるものか
俺たちの明日の「いのち」を　そしてくらしを
守るためにも

短編小説

心のみだれ

三川指導部　まえかわてつや

「毎日残業して、日曜日には必ず出て、月に三十万も仕事をして、月にいくら残している。いまなら年も三十才だからできると思う。さらに、自分が一生懸命打ち込めるような仕事をしたい。いまのようにいやいやする仕事じゃなく、仕事に情熱を燃やしてみたいと思う」

テツの声はだんだん大きくなり、忘年会の席を完全に忘れたかのようである。

「仕事に情熱を燃やす。男らしく本当にやりがいのある仕事をしたい。それはだれでも同じ。テツはどのような仕事を、何をすればいいとな。仕事をすることが、苦痛にならんとな。人と時間に拘束され、自分の言いたいことも言えん、使われとる身じゃろもん。会社という組織の中じゃ、自分の自由意志はなかつぱい。テツの身体の中にある反抗精神のある限り、どこへ行ってもいまのような気持になって、またそこをかわりたいと思うとじゃないな」

イチの声も熱をおび、いまや隣りで歌う声も二人の耳には入らなくなった。

「パッパー」、テツは娘の声を聞いたような気がして心がすこし静まった。

「反抗精神——うん、うまいことをいうな。しかしよ、イチも共かせぎだろう。たった一人の息子を保育園に預けて、仕事をしている。それでも金は残らんでしょう。イチも車に乗る。もし明日交通事故にあい、負傷したら、生活はどうなるな。いや、死んだらどうなるな。あとが必配でしょう。風邪もひかれんでしょう」

イチもまけてはいなかった。

「うん病気、交通事故、災害。るいは交通事故で死んだというとき、あんたはだまっとくな。オレのかあちゃんや息子のため、何もしてやらんな。

見舞に来るでしょう。カンパを訴えて金を集めたり、あんたの小供が二人、三人となったとき、いまのような生活ではどうなるな。

オレ達には、金も権力もない。しかし、仲間意識がある。お互いに助けあって生活していくという的、精神的な疲れをとるためにはそれだけの金がいる。

いまの社会、資本主義社会の中で、どうもならんだろうが。体制的合理化と、テツも言うじゃないか。いまは日本国民全体が、一部資本家のため自分たちの生活を強制的に押し下げられて、苦しめられている。そん中で、テツ一人良くなろうと思ってもできるな。

テツは仲間意識と闘いて、口をつぐんでしまった。今日まで悩み苦しみながら毎日を送ってきた自分の心の中で、イチが言った反抗精神、仲間意識という言葉がぐるぐるまわりはじめた。

かりに、オレが病気をした、あるいは交通事故で死んだというとき、あんたはだまっとくな。オレのかあちゃんや息子のため、何もしてやらんな。

見舞に来るでしょう。カンパを訴えて金を集めたり、あんたの小供が二人、三人となったとき、いまのような生活ではどうなるな。

高校を出てすぐ、けい肺という不治の病気で倒れた父親との入替採用となり、三川鉱に入った時から彼の生活は多くの仲間＝三池労組という組織の中でささえられ、また労働者として大きく成長し、今日のテツを作りあげたのだ。

さる昭和二十八年の『英雄なき一二三日の闘い』の主役として、三日三晩雨の山の上クラブで闘い、ついに自分たちに対する三井鉱山の解雇通告を撤回させた父親。でも、復職の喜びもまだ忘れられない二十九年三月には、早やけい肺という『死の宣告』を受けることになり、以来五年間という長い病気と闘ってきた父親。この父親もまた炭掘る仲間の団結の中で人間として生きることをもとめて、最後まで生き抜いたのである。

思えばその大きな組織の中に、テツも温かく迎えられたのだ。入社した翌月からテツはもう、時限スト、方別ストと、会社の非情な労務政策に抵抗して闘う三労組の団結の中で、身体を通して正しい生き方を学び、入社後半年するとあの三池闘争の渦中の人となったのである。

『去るも地獄、残るも地獄』を合い言葉に、ホッパーの下で、レールを枕に寝たこともあった。有明海の冷い潮風の吹く三月から、真夏のさんさんと照りつける太陽の下で、会社がチャーターしたヘリコプターをにらみつけて憎しみを燃やし、秋風が吹き、初冬の風が吹きすさぶようになるまで、全国の仲間にささえられ、同じ仲間の首を切ってきた独占資本と権力の力に抵抗し、闘ったのだった。

この大きな抵抗闘争の中でこそテツの反抗精神は養なわれたのであり、また就労時の不当確者というレッテルをはられ、差別待遇を押しつけられる中でさらに労働者としての成長を加えていったのだ。

いわばその反抗精神、仲間意識のしあわせをめざし前進する努力の中からこそ、道はじめて開かれていくのではないか」

テツはだまって、手にもっていたさかずきを飲みほした。テツの横には、いつのまにかトクが座っていた。向こうの方では、さかんに手拍子が鳴っている。

「自分一人で、くよくよ考えても良い考えは浮かばない。隣りの食事が良く見えるように、外の場所がとかくよくにいいように見えるものだ。テツのまわりには、オレ達がいるではないか。くよくよ

イチは言葉を続けた。

「どんなにつらくとも、いまいるその場所を明るくきれいな、楽しいところにかえようという意欲がないなら、どこに行っても同じではないか。自分の前に立ちふさがる竹藪は、自分が切り開いて道を作らなければ前に歩くことはできない。

歩く社会の道は、さらにけわしい。自分一人前に歩いたところで、歩けるものではない。多くの仲間が手を取りあって、働く者のしあわせをめざし前進する努力の中からこそ、道はじめて開かれていくのではないか」

テツはだまって、手にもっていたさかずきを飲みほした。テツの横には、いつのまにかトクが座っていた。向こうの方では、さかんに手拍子が鳴っている。

「自分一人で、くよくよ考えても良い考えは浮かばない。隣りの食事が良く見えるように、外の場所がとかくよくにいいように見えるものだ。テツのまわりには、オレ達がいるではないか。くよくよ考えずに、お互いにゆっくり話し合う。そこから自分はどうすれば良いのか、何をしたら良いかわかるはずだ。

もっともっと、これからは話し合う場を作ろうではないか。テツの悩みはオレも悩んで来たことだ。だれでもが悩み考え、そして苦しんできた道なんだ」

トクの言葉はやさしく、静かにテツの心にひびくのだった。その夜、テツが大いに飲んだことはいうまでもない。

そして十二月十三日、平均九万六千円のボーナスが支給されたが、テツの袋は七万五千円であった。「これだけの金が毎月あればなあ」と思いながらも、テツはその夕開催された南荒尾駅の無人化反対集会に参加したのであった。

「ボーナスもらったら、それを機会に炭鉱をやめる」と言っていたテツは、その後心に変化があったのか、それとも環境に変化があったのか知る由もないが、だが今日も彼は三川鉱の門の中へ姿を消していった。

短歌

三川指導部　木村守

あたたかく冬の陽の照る縁側に白毛抜かせて
妻は子とをり
遠く子の勤めてあればそを語り金送り来れば
涙出す妻
声入れて送りしテープ聞く寮の者泣きたりと
愛しく聞かす

臼井　木村理子

洗い古りし三池主婦会のはちまきも動員を待ち
タンスの隅に

主婦会と共に育ちし吾が性も貧しき中に心の富
むも

宮浦指導部　平田光男

くいしばり天井低き坑道にカッペになって吾が
子の名呼ぶ
くたくたにつかれし体横たえて寝返りうつもひ
きつる手足

四山指導部　堀前はるを

坑口の注連くぐりゆく坑夫等の氷の袋肩に重た
し
一献の屠蘇酌み交す坑夫等の差別に耐えし指の
逞し
妻として差別に耐えて生活守ること誓ひなん屠
蘇を酌みつつ